

令和 7 年 6 月 10 日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K10960

研究課題名（和文）認知症の人と家族に対する外来看護師による診断後支援モデルの検討

研究課題名（英文）A study of a model for post-diagnostic support by outpatient nurses for people with dementia and their families.

研究代表者

木島 輝美 (Kijima, Terumi)

札幌医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：40363709

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：わが国では、認知症の診断を受けてから介護サービス等を利用するまでの診断後支援が未整備である。そのなかで、外来看護師は認知症の診断直後から継続的に認知症の人と家族に支援できる立場にあり、認知症診断後支援の役割を担うことが期待される。そこで本研究では、認知症の診断を受けてから介護サービス等を利用するまでの期間に焦点をあて、認知症の人と家族が求める支援および認知症に関して専門性の高い看護師が実践している支援を明らかにして、外来看護師による認知症診断後支援モデルの原案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国の認知症施策では認知症の早期診断・早期対応が推奨されているが、認知症の診断を受けてから介護サービス等を利用するまでの診断後支援が未整備である。認知症の本人組織では、このような期間を「空白の期間」と呼び、絶望に陥る人があつを絶たない現状がある。よって、認知症診断後から介護サービス等を利用するまでに必要な支援を明らかにして、外来看護師による認知症診断後支援モデルを作成することにより、認知症診断後の早期から効果的な支援が実施できる。それにより認知症の人と家族のニーズにあった知識提供や心理的安定と社会参加やタイムリーなサービス利用等につながり、より長く住み慣れた地域で質の高い生活を継続できる。

研究成果の概要（英文）：In Japan, post-diagnosis support from the diagnosis of dementia to the use of nursing care services has not yet been established. Outpatient nurses are in a position to provide continuous support to people with dementia and their families immediately after the diagnosis of dementia, and are expected to play a role in post-diagnosis support. Therefore, this study focuses on the period from the diagnosis of dementia to the use of nursing care services. The study clarified the support sought by people with dementia and their families during this period, and the support practiced by nurses with high expertise in dementia. From this, a draft model for post-diagnosis support of dementia by outpatient nurses was developed.

研究分野：老年看護

キーワード：認知症 診断後支援 外来看護

1. 研究開始当初の背景

わが国の認知症施策では認知症の早期診断・早期対応が推奨されているが、認知症の診断を受けてから介護サービス等を利用するまでの診断後支援が未整備である。認知症の本人組織では、このような期間を「空白の期間」と呼び、支援体制が未整備であり絶望に陥る人があとを絶たない現状がある。そのため認知症の人と家族は、診断後速やかに認知症の状態に応じた専門機関の支援につながるシステムの構築を政府に要望している。また認知症の診断後支援に先進的に取り組んでいるスコットランドでは、リンクワーカーという専門職が認知症と診断された本人と家族に対して継続的に支援を行う制度が確立している。しかし、わが国にはリンクワーカーの役割を担う専門職は明確ではなく、どの職種が担うべきか様々な議論がある。そのなかで外来看護師は、認知症の診断直後から継続的に本人と家族に支援できる立場にあり、診断後支援の役割を担うことが期待される。

そのため本研究では、わが国の認知症の人と家族は診断を受けてから介護サービス等を利用開始するまでの期間にどのような支援を求めているのか、外来看護師が認知症の診断を受けた本人と家族に対して診断後支援を実践するために必要なことは何かを明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症の人と家族が認知症の診断を受けてから介護サービス等を利用開始するまでの期間に求める診断後支援を明らかにすること。外来看護師の視点から認知症診断後支援の現状と課題を明らかにして支援モデルを作成することである。

3. 研究の方法

(1) 研究の方法

認知症の人を介護する家族の認知症診断後から介護サービス等を利用するまでの経験を明らかにするため、複線径路・等至性モデル(TEM)を用いて質的研究を実施した。認知症の人を介護する家族8名を対象に半構成的面接を実施した。逐語録から事例ごとに、認知症診断から介護サービス等の利用に関する語りを抽出し、意味のまとまりごとに切片化した。そして切片化したデータを、認知症の診断を受けた時を起点として安定して介護サービス等を利用できるまでの経過のなかで時系列に並べてTEM図を作成した。各事例が時間経過の中でどのような径路を辿るのか、またその径路に影響を与えたものは何かを分析し、さらに事例間のTEM図の共通点と相違点を分析した。

(2) 研究の方法

専門性の高い看護師が、認知症診断直後から認知症の人の家族に対して実践している認知症診断後支援の現状と課題を明らかにするために質的研究を実施した。認知症外来で診断後支援を実践した経験のある専門性の高い看護師6名を対象に半構成的面接を実施した。分析はSCAT(Step for Coding and Theorization)の手法を参考にした。逐語録から事例ごとに認知症診断後支援に関わる内容を抽出し、データの中の着目すべき語句、それを言いかえるためのデータ外の語句、それを説明するための語句、そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングを行った。そして、テーマと構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きをおこなった。

(3) 認知症診断後支援モデル項目案の抽出方法

研究1と研究2の結果にもとづき、認知症の人と家族に対する外来看護師による診断後支援モデルの項目案を抽出した。まず、研究1の専門性の高い看護師を対象とした研究で得られた、「認知症診断後支援を実践するためのシステムづくり」に関する6項目、「認知症の人の家族に対する認知症診断後支援の実際」の13項目を基盤とした。そこに認知症の人の家族介護者が求める支援内容として、「信頼できる専門職の条件」、「認知症症状の変化に応じた支援」、「認知症の進行を予防するための支援」の要素を加えた。さらにスコットランド認知症ワーキンググループにより提唱された「認知症診断後支援の5つの柱」を中心に認知症診断後支援に関連する文献から重要な要素を抽出した。

4. 研究成果

(1) 研究の結果

認知症の人を介護する家族の認知症診断後から介護サービス等を利用するまでの経験の等至点は「認知症の人に合ったサービスを利用できることで生まれる心の余裕」であった。それは、認知症の人の家族にとっては介護サービス等につながるものが等至点ではなく、つながった介護サービス等が認知症の人に適しており穏やかに利用できる状態となって初めて心の余裕が生まれていた。

等至点までの径路のなかで重要な分岐点として、認知症の診断後に介護サービス等を利用できたか否かがあった。認知症の診断後すぐに専門職から支援を受けて介護サービスを利用できた家族のほうが、大きな混乱がなく等至点に到達することができた。専門職からの確かな支援を得られなかった家族は、独力で手探りのままで情報収集することとなり、介護サービス等を利用するまでに時間がかかった。もう1つの重要な分岐点は信頼できる専門職との出会いであった。よく話を聴いてくれて要望にそって迅速に対応してくれる専門職の存在により認知症の人の家族は心理的安定を得ていた。認知症の人の家族が求める支援は、認知症の人の症状の進行とともに変化していた。そのため信頼できる専門職と常につながりを持ち、状況に応じてタイムリーに支援を求めることができる体制が必要であった。そして、認知症の人の家族は共通して認知症の進行予防を強く願っていた。それは認知症の初期に限らず、認知症がある程度進行してからもつづく願いであった。よって家族の認知症進行予防への思いに寄り添いながら生活の中で無理なく継続できる脳の活性化の方法を提案していく必要がある。一方で、認知症外来受診の際に看護師から支援を受けたと感じている対象者は少ない現状も明らかとなった。

(2) 研究の結果

認知症診断直後から専門性の高い看護師が、認知症の人の家族に対して実践している認知症診断後支援の現状と課題として大きく2つの実践内容に分けられた。1つ目は「認知症診断後支援を実践するためのシステムづくり」、2つ目は「認知症の人の家族に対する認知症診断後支援の実際」であった。

認知症診断後支援のシステムづくりでは、〔認知症診断後支援を必要とする認知症の人と家族の選定〕〔医師との信頼関係を構築〕〔自身の活動に裁量権がある〕〔認知症の相談業務の院内での位置づけの明確化〕〔地域の専門職とのパートナーシップの構築〕という実践に加えて〔外来看護師の相談時間確保の困難〕という課題の6項目に分類された。外来看護師は、専門性の高い看護師と同様の活動は困難であるが、専門性の高い看護師との協働実践の経験により認知症診断後支援に対して前向きな姿勢に変化していた。

認知症の人の家族に対する認知症診断後支援の実際では、〔不安の強さや家族の介護力などから相談の必要性を見極める〕〔相談窓口の明確化と積極的な声かけによる相談しやすい関係の構築〕〔診断直後の認知症への負のイメージの払拭〕〔混沌とした現状を整理して橋渡しや将来を見据えた情報提供〕〔認知症の人の家族のありのままを支持〕〔認知症の人と家族との関係を調整〕〔多職種連携により認知症の人の家族との適度な距離感を保持〕〔生活状況を把握して介入タイミングと具体策を検討〕〔看護師の弱みも隠さずともに歩む姿勢〕〔認知症の人のもてる力に着目〕〔初期や若年性認知症の人の居場所づくりの必要性〕〔当事者同士のつながりの重要性〕〔初期認知症の人のための進行予防の取り組み〕の13項目に分類された。なかでも専門性の高い看護師は、診断後支援を必要とする認知症の人の家族と早期に出会い、信頼関係を構築することを重要視していた。しかし、認知症診断後支援を今後も継続するためには、専門性の高い看護師の努力だけでなく、多職種が連携して組織的に実践していく必要がある。なかでも外来看護師は認知症の人と家族に出会う機会が多いため、気軽に声をかけられる最初の相談窓口としての役割が期待されることが示唆された。

(3) 認知症診断後支援モデル項目案

研究の専門性の高い看護師を対象とした研究で得られた、認知症診断後支援のシステムづくりの6項目と認知症の人の家族に対する認知症診断後支援の実際の13項目を基盤にして、認知症の人と家族に対する外来看護師による診断後支援モデルの項目案を抽出した。

研究の結果に不足していた視点は、研究の認知症の人を介護する家族の経験から得られた「認知症の人の症状の進行とともに必要な支援も変化していたこと」そして「進行してもなお家族は認知症の進行予防の支援を強く願っていたこと」であったため、これらの項目を追加した。

また、研究の結果をスコットランド認知症ワーキンググループにより提唱された認知症診断後支援の5つの柱と比較検討した際、「将来のケアの計画」と「将来の意思決定」の視点が不足していたため、これらの視点を認知症診断後支援モデルの項目に含めることとした。近年は、厚生労働省でもアドバンス・ケア・プランニング(ACP)に「人生会議」という愛称を決定し普及啓発に力を入れている。しかし、わが国では認知症の症状が軽度のうちから終末期のことを話題にすることに抵抗がある人も少なくないと考えられる。そのためわが国の現状にあわせて、認知症の初期から誤解のないよう丁寧な説明をして慎重に話を進めていく必要があると考えた。

このように、研究と研究および関連文献より抽出した項目を認知症診断後支援モデルの項目案として作成した。

しかし研究の結果では、認知症外来受診の際に看護師から支援を受けたと感じている対象者が少ない現状があった。さらに研究の結果でも〔外来看護師の相談時間確保の困難〕という課題が抽出されていた。このことから、今回作成した認知症診断後支援モデルの項目案を、認知症について専門性の高くない外来看護師にそのまま適用することは難しい可能性が示唆された。

(4) 今後の展望

今後の展望としては、今回作成した認知症診断後支援モデルの項目案について、認知症外来の看護師に重要度や実践可能性の観点から評価してもらい優先順位を示すことで、外来看護師の専門性や経験の多寡に応じて認知症診断後支援を実践することができ、支援の質を担保することができると思われる。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木島 輝美, 林裕子, 山本道代	4. 巻 23巻3号
2. 論文標題 初期の認知症の人を介護する配偶者の認知症診断後から介護サービス等を安定して利用できるまでの経験	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本認知症ケア学会誌	6. 最初と最後の頁 544-555
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 木島輝美, 林裕子
2. 発表標題 認知症の人を介護する配偶者の認知症診断後から介護サービス等を利用するまでの経験
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kijima T, Hayashi Y, Umebayashi H
2. 発表標題 Challenges in Post-Diagnosis Support for Patients with Dementia and Their Families
3. 学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023: EAFONS (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	林 裕子 (Yuko Hayashi) (40336409)	天使大学・その他の研究科・教授 (30122)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	奥宮 暁子 (Okumiya Akiko) (20152431)	札幌医科大学・その他の部局・名誉教授 (20101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関